

十点

③ひとりには多き豆煮る夜寒かな

佐渡谷秀一

デパートで東北の物産展があると乾燥青大豆のひたし豆を必ず購める。長時間水に浸しておいて、一時間程ごとくと煮る。あとは塩を振ったり、適当な味付けをする。一緒に暮らしていた義母が九月に亡くなったので、鍋一杯煮た豆を一人で味わっている。

六点

②ハンセンの無実の訴訟茨の実

松浦かほる

一九五一年に起きた藤本事件（菊地事件）についての記事が新聞の一面全部を使って掲載されているのを読みました。ハンセンという病についての差別が無かったら存在しなかった死刑冤罪事件の詳細と元患者の方々の国賠提訴がはじまったというものでした。一番恐ろしいのは病そのものよりも世間の偏見と生涯つきまとう差別と知りました。人生そのものや国相手の裁判という長い厳しい茨の道もいつか幸せの実と結びつくことを祈ってやまないのです。

五点

②海峡の風を掬ひし秋つばめ

増田 守

海峡を挟む岬に立ったとき目にする秋つばめは、越冬地へ帰るつばめである。その飛び方は日本の空と別れを惜しむかのようなのである。風を大きく掬っているかのように飛び回っている。無事帰り着き、来年も戻って来て欲しい。

①姨捨の地名残りし十三夜

増田 守

姨捨駅は長野県千曲市大字八幡姨捨四九七番地にある、J R 東日本・篠ノ井線の駅である。善光寺平の棚田に映る月は、「田毎の月」として有名である。姨捨は、棄老伝説に基づく民話であるが、その伝承は世界各地に残っている。少子高齢化による財政破綻を懸念して今、老人保健施設維持の危機が密かに言われている。

晩秋やひねもす響く槌の音

桜井 幸枝

静かな住宅街。わが家より数軒離れた先の距離間もよかったのであろうか決して喧しくない。晩秋の空気をまとい乍ら蒼天へと響く音はいかにも心地よかった。工期も迫っていたかも・・・

鰯雲旅の仕舞ひの足湯かな

藤崎安紀子

十月末に東北へ一泊旅行をしました。ずい分歩き回り、最後に立ち寄った銀山温泉で足湯して、疲れた足を休めながら、ふと空を見上げると鰯雲がいっぱい。ああ、楽しかった旅行もこれでおしまいかあーとしみじみとした気持ちになりました。

四点

①初紅葉座り直して絵筆かな

恩田 才美

一本の大げやきの紅葉。歳勝土遺跡の吟行から一週間後、詠み足りない思いにかられ、再度訪れました。初紅葉の厳肅で雅びなたたずまいに圧倒されました。感動を絵筆にも込めて身体感覚で表現してみました。

①百選の橋の真ん中翳雲

稲葉 幸

愛川町の知人宅を訪ねた折、渡った橋です。「神奈川百選の橋の一つ、旧平山橋という。大正時代の鉄骨アーチ型造り、又、第二次大戦時の弾痕の残型あり」と、説明の立札がありました。現在は、人のみが通行する歩道橋です。因みに横浜は「万国橋」が百選の一つです。

①老万歩歩かにならぬ秋時雨

京林 眞壽

そぼふる雨の中、健康維持のためとは言え、消極的な外歩きを表現できましたでしょうか。

①窓拭きの散らす秋雲摩天楼

恩田 才美

秋晴れの気持ちのよい日、浜離宮での句。途中、車窓から高層ビルの窓拭きのゴンドラを見ていました。秋雲の広がり、離宮を囲む高層ビルの窓、そこに点となり動く人影を写しとってみました。

秋澄みて根巻はじまる吉野杉

古野 明美

造園会社の職人さん達の熟練の技で行われる根巻。根を切らぬよう、スコップで少しづつ、根元の回りの土を掘り進めて行く。根の塊が姿を現すと、丁寧に、素早く、藁や麻の繊維を巻きつけて行く。根巻が終わると、クレーンに吊るされ、トラックに積み込まれ、生まれ育った山を離れる。そして、新天地に移植され、大きく根を張って、やがては大木となるのであろう。職人さん達の丁寧な仕事振りに感動しての一句であります。

頬つたふ目薬ぬぐふ朝寒し

佐渡谷 秀一

毎年の健診の数値からは疑いもなく糖尿病である。内科医にちゃんと眼も診てもらおうように言われ、数年ぶりに訪ねた目医者で白内障の進行を止める薬を貰った。自覚症状は全くないのだが、日に三度、目薬を溢れさせている。

ぬま杉の歴史閉じらる秋の暮

稲葉 幸

十月三十一日に、桜蔭会事務局へ行きました折、現在の「ぬま杉」は落雷や台風で枝が折れ、以前の高さはないので、真緑の長い葉を茂らせていました。ところが、山下さんの話で、「ぬま杉は切られるんです。すでに

御  
被いも済みました」「ええ！」びっくり仰天でした。先輩の方々は勿論、俳話会の皆様も残念なことです。門から振り返って一礼し、トボトボと藤棚の坂を帰って来ました。

